

ユースが安心できる居場所をつくるには？

竹宮彩香

(愛媛大学大学院教育学研究科心理発達臨床専攻)

研究の目的

近年、青年は人と一定の距離を置きつつ、相手に同調することで友人関係を保っているといった、表面的な対人関係を形成する傾向にあることが明らかになっている(宮木, 2013)。そのため、満足感につながる人とのつながりをつくることは重要である。そこで、私は青年の居場所をつくる活動を始めた。一般的には「15歳から24歳までの若者」をユースとされることが多い(国連広報センター, 2018)が、この研究では現実的なニーズに即して、10歳から20歳くらいの若者をユースと定義して研究することとする。先行研究の中では、対人関係と居場所に関しての知見が多く取り上げられているが、実際に知見をもとに居場所づくりを展開したことを記載した研究は少ない。この研究では、私が実際に居場所づくりにかかわり、ユースが居場所だと認識する過程を私の考察を交えながら詳細に記載する。その中で私は、居場所づくりを通して、段々と参加者の会話に変化が生じていることに気付いた。そのため、私が企画、開催したイベントの中で、ユースが相談的な会話に至るまでのプロセスモデルを、アクションリサーチを通して提案することを目的とする。

方法

私は、A県のNPO法人が主催する、C街にある子ども食堂兼飲食店のD食堂内でX年に大学生が自由にイベントを企画し、居場所の存在を広めてほしいという要望があることを知った。私は吹奏楽をしており、音楽を中心としたイベントを企画することができるのではないかと考えた。そこで、開催するイベントを同じ研究室に所属する、吹奏楽経験者である学部生とともに企画したいことをNPO法人の代表の方に伝えたとこ、承諾を得た。

イベントはX年の3月から企画し、毎週金曜日に参加している。そしてイベントに参加する参加者たちや、イベントにかかわる大学生や大人の言動を記録したり、イベントを実施する中で私が気になる点を質問したりしながら、現場メモとして残す。その後、フィールドノーツを作成する。フ

ィールドノーツは、X年3月から8月まで作成した。今回は、継続的に参加していたれんさん(仮名)の発言を取り上げ、グループ化する。そして、れんさんの会話の変化を表す。

結果

X年4月26日から5月17日までは、れんさんは主に一方的に自己開示をする【周囲が受け止めにくい発言】をしていた。段々と居場所の中で話せる人を見つけたことで、X年6月7日から7月12日までは、主に【私に訴えかける発言】へと変化した。そして自身のことを受け止めてもらう経験を多くしたことで、X年7月19日から8月9日は、主に自慢話以外の広く、深い内面を伝える【相談的な会話】へと変化した。

私は、れんさんの自慢話を聞き、最初は肯定するのみだった。しかし、仲が深まるにつれ、笑いながら少しだけ発言もするようになった。

考察

れんさんは音楽に関する自慢話を通して、イベントの中で自身の存在意義を模索していたのではないかと考えられる。そして、私がれんさんの発言一つ一つを受け止めて返したことで、れんさんは段々とどのような一面も受け止めてもらえるという経験をすることができたと推測する。そのうえで、れんさんは広い範囲で自己開示をするようになったり、感情が揺れた経験を話すようになったりしたのではないかと考えられる。一方、私自身もれんさんと過ごす中で、ありのままの自分で接しても良いという考えになり、緊張感が減少した。これは、れんさんが多くの自己開示をしている姿を見て、私もこの場所は何を話しても良い所だと認識したと考えられる。以上のことから、参加者とイベントの企画者との相互作用で、居場所の在り方が変化するのではないかと推測する。

引用文献

国連広報センター(2018). 国連のユース戦略
宮木 由貴子(2013). 若年層の友人関係意識 株式会社第一生命経済研究所